

浄青神奈川

大本山光明寺御法主 藤吉慈海台下御染筆

神奈川浄青機関紙
第 15 号

発行日 昭和63年 6 月 1 日

「和合と実践」

神浄青会長

野 呂 幸 忍



さて私たちの住む神奈川は、海や山、湖と自然環境に恵まれ、住む人々の心を和ませ、他の地域からは羨望の的であります。また文明開化以来、横浜を中心として諸外国との交流も盛んに行なわれています。

この度、一一〇余名の会員のご推薦を受けまして、第七代神奈川教区浄土宗青年会会長を務めさせて戴きます。何分にも浅学非才の身ではありませんが、伝統ある神浄青の名を汚さぬよう一所懸命がんばりますので宜しくお願い申し上げます。

このような中で、人口も急増し土地価格が高騰致しました。また「都市化」の急速な進行により人々の「心」が、変化に戸惑い不安定なゆとりのない状態で日々の生活を送っています。このような現状の中で、私たちは浄土宗の青年僧侶が、「若さ」を力として研修し、「心」を鍛え、私たちを取り巻く困難な環境を打破していく

実践こそが、「明るい・豊かな社会」を築き上げる道であると確信致しております。本年度は、

一、浄青活動の理解と浸透
二、会員相互の研修・交流
三、全浄青・関プロ浄青並びに教区事業への積極的参加

を三つの柱として「会員全員が参加の出来る浄青活動」をスローガンに、執行部・役員一丸となって、邁進していく所存であります。宜しくご協力をお願い申し上げます。

また本年は、神浄青創立以来十五年目を迎える節目の年であります。

歴史の重みを私自身、並びに会員一人一人が自覚をし、先輩たちが歩まれた道を踏み外す事なく、そして後輩にスムーズに引き継いでもらうことが重要ではないかと考えております。神浄青に皆様方の英知を結集していただき、ご指導・ご鞭撻をたまわりますようお願い申し上げます。挨拶とさせていただきます。

昭和六十三年度 事業計画

四月十六日

花祭り愛のプレゼント

金沢母子寮

四月十六日 総会 光明寺

五月十四日

第一回理事会・新旧役員歓送迎会

横浜・中華街（華正楼）

六月一日 神浄青機関紙発行

六月十六・十七日

第十六回関プロ総会並びに研修会

山梨・石和温泉（喜仙）

六月二十八日 第二回理事会

七月四日 開山忌前清掃奉仕

七月二十八・三十日

夏期僧堂手伝い・第三回理事会

光明寺

八月二十六・二十七日

全浄青中央研修会 旭川

九月上旬 第四回理事会

十月上旬

第六回神浄青ソフトボール大会

未定

十月十二・十五日

十夜手伝い・念仏行進・街頭伝道

光明寺

十月二十一・二十二日

第六回関プロソフトボール大会

長野（上山田温泉）

十月下旬 第五回理事会

十一月十九日

十五周年記念行事 鶴ヶ岡会館

未定 全浄代表者研修会

昭和六十四年一月二十五日

別時念仏会 光明寺

二月六・七日

他宗見学並びに第六回一泊理事会

三月下旬 第七回理事会



總會報告

昭和六十三年度神淨青総会は四月十六日大本山光明寺で開催されました。開会の辞に続き、戸松会長の挨拶。会長は二年間の任期を大過なく全う出来たことに感謝の意を表しました。続いて北邨執事長のご祝辞。執事長は大本山の参詣者の姿勢が引卒者の姿勢に依って決まるという事を例に浄青会員の自覚を促しておられました。続いて議長に永原師を選任して議事に移り、昭和六十二年度事業報告と同じく会計報告を受けました。監査の里見師より適正との会計監査報告があり、又、特別会計の取り扱い方や出納帳の利用等の貴重な助言がありました。次に新役員の承認と新執行部の発表があり、野呂新会長は前会長の足跡を踏まえて邁進することを誓い、十五周年事業等の抱負を表明されました。議事に続き、加行成満者の発表と藤吉御法主御染筆の色紙と浄青袈裟を贈呈。当日出席の京浜組市田師と港南組吉川師に盛大な拍手が送られました。終わりに副会長長鳥居師より閉会の言葉があり、神淨青の今後の益々の発展を祈りつつ総会は終了いたしました。尚、当日の出席者は二十二名を数え、委任状提出者は四十一名でした。

昭和63年度
神淨青役員名簿

野呂幸忍	小松成法	北郷賢雄	古庄良源	吉智彦栄	塩智彦	宮林彦	森本康	西井雄	吉智栄	宮林彦	杉田一彦	永原道雄	夏見裕	戸松明	鳥居真	伊藤敬史	佐々木易	横井隆彦	平元法	吉川浩教	山沢信	安藤敦	瀬高順康	国松俊春	新原千春	村井昭賢	松井清貴	一井真光	池田敬道	阿川文	北郷賢雄
副会長	事務局長	書記長	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事
常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事	常任理事
野呂幸忍	小松成法	北郷賢雄	古庄良源	吉智彦栄	塩智彦	宮林彦	森本康	西井雄	吉智栄	宮林彦	杉田一彦	永原道雄	夏見裕	戸松明	鳥居真	伊藤敬史	佐々木易	横井隆彦	平元法	吉川浩教	山沢信	安藤敦	瀬高順康	国松俊春	新原千春	村井昭賢	松井清貴	一井真光	池田敬道	阿川文	北郷賢雄

組
だ
よ
り

鎌倉組

我が鎌倉浄青は、慢性的な人材不足に悩まされている。このために、何か新たな活動を企画したくても、なかなか儘にならない現状である。従って今回も、例年と変わりばえのない活動状況を報告しなければならぬのは、真に心苦しい限りである。

港南組との合同法式研修会は、津田徳翁先生を講師にお迎えして、昨年度も三回開催された。研修の内容は、若い会員が、日常の法務において、実際に役立つような事柄を、毎回選ぶようにしている。

又、三浦組と合同で、恒例の歳末たすけあい托鉢を、横須賀中央駅前にて行い、今回も多額の浄財を得ることができた。

さて、今年は、役員改選の年に当たっているが、当鎌倉浄青も、去る四月二十一日に総会を開催し、以下のように役員を改選した。

支部長・国松俊康、副支部長・玉木弁生、事務局長・新原千春、会計・富田浩雅、渡部俊賢、監事・鳥居真理

これで役員の平均年齢は、一挙に二十歳代に若返った次第である。三年間、支部長を務められた鳥居上人たいへん御苦労様でした。

會員近況

結婚
西念寺
富田
浩雅

住職 認証 西徳寺 玉木 弁生

新入会員 光伝寺 安田 裕志

真福寺 安井 昭道

專福寺 成田 善俊

最後に、鎌倉浄青発足の当初より

運動に御尽力下さり、県浄青会長

歴任なされた、野中岳道上人が

限りでCB会員に退かれるこ

長年に渡って 本堂に

三浦組

新役員名

長村井昭賢(光善寺)

会長 小松崎 成 法(東漸寺)

松井清貴(光念寺)

純（三樹院）

計吉水祥史(天養院)

年間計画等

定例総会 五月、十二月

式講習会 随時

年 会 十 二 月

泊研修会 隨時（年一、二回）

歳末助け合い募金活動

十二月（鎌倉組と協賛で）

港南組

昨年度は港南浄青発足十周年を迎え、会員主催による三人遠足記念法要の厳修、併せて土屋光道師を招いての記念講演を円成させ、一応の節目としました。

本年度は新会長に塩沢智彦が就任し、加えて若手会員も積極的な動きを見せ会の更なる発展が期待されている。これ迄の法式研修会（津田徳翁先生・布教研修会（土屋先生）に加えて、会員に鎌倉光明寺に伝承される引声に触れ親んでもらおうという引声研修会、又寺院経営の面から税務講習会と二つの新講座が企画されている。是非、興味関心のある有志は組の枠を越えて参加していただきたい、とは新会長の弁である。更に7月22日には手づくりの「少年少女帰敬式（仮称）」を開催し、実践的な教化活動の中で会員相互の親睦と信頼の充実に努めています。

小田原組

小田原浄青は、昭和四十八年に発足以来、本年は十六年目を迎えるようとしております。

新会長 阿川 文叡（第六代目）
副会長 本多 行一

北邨 賢雄

会計 村瀬 秀紀

新執行部による新たなスタートが切られようとしております。長き実績と新しい潮風をのせて、期待される人物群であります。

活動は、

一、自己研鑽（資質向上）

二、会員相互の親睦（レクリエーション）

三、伝導強化（広報活動）

を三本柱に、毎年活発な行事が催されています。

会員近況

加行成満 浄蓮寺 宮嶋 俊道

結婚予定 近日中

道場院 都築 顕道

高座組

現在のところ高座組浄青は特別な行事計画もなく、会員相互の交流も充分にできていない状況です。

県浄青の役員の方々には申し訳ない気持ちですが、時間的な制約も多く各種行事に参加できません。

最近組内にも若い方々が多くなってきたようですので、本年度は大いに声をかけて、組内は勿論ですが本部行事へも積極的に参加していただくよう努力して参りたいと考えております。

よろしくお願い申し上げます。

京浜組

京浜浄青は総会を四月十日に開催し、事業報告・会計報告の後新役員の改選が行われた。顔ぶれが一新しい会長寿福寺伊藤光史、副会長専念寺佐々木敬易、会計大光院宮林雄彦、書記慶岸寺林田康順の各師が選出され、各々の抱負を語った。

今年度は京浜組浄青十周年にあたる。その記念として、専福寺住職成田光俊上人を講師に招き四年に亘り続けられた布教研修会での会員の実演法話をまとめて一冊の本にしよう、という計画が実現されつつある。また、五月からはいつい我流に走りがちな法式への警鐘として法式研修会を開催することも決定した。

現在の会員十三名、昨年十月には元会長林田真成師が、またこの四月には宮林雄彦師が目出度く御結婚され、新会員に正行寺白石淳雄君を迎え益々意気上がる京浜浄青である。

中郡組

前年と同様組独自の活動が出来ない状態が続いている。組浄青として再編成の時期に来ている様である。

会員の五分の四が民間又は寺以外の会社勤めである以上、何等かの形態で活動を促進する事が必要である。

港北組

港北浄青は六十三年度になり、会長に横井隆彦、副会長に平元正法、事務局局長に夏見裕貴、会計に久米真浩が就任し、若手会員が多い港北浄青を引っ張っていきます。ここ数年間小人数のため研修活動等の浄青活動は思うにまかせない状態で、組教化分団長の柴田先生にお世話になりっぱなししておりますが、今後は主体性をもって活動し、また神浄青の事業にも積極的に会員の参加を促していきたいと思えます。会員の近況は、浄泉寺井村真則君が伝宗伝戒道場を成満され、横井隆彦君に待望の法嗣が誕生いたしました。

港北浄青は六十三年度になり、会長に横井隆彦、副会長に平元正法、事務局局長に夏見裕貴、会計に久米真浩が就任し、若手会員が多い港北浄青を引っ張っていきます。ここ数年間小人数のため研修活動等の浄青活動は思うにまかせない状態で、組教化分団長の柴田先生にお世話になりっぱなししておりますが、今後は主体性をもって活動し、また神浄青の事業にも積極的に会員の参加を促していきたいと思えます。会員の近況は、浄泉寺井村真則君が伝宗伝戒道場を成満され、横井隆彦君に待望の法嗣が誕生いたしました。

会

— 心の扉を開く一日 —

(於)大本山光明寺



講話「人生の真実を求めて」
土屋光道先生

講話「人生の真実を求めて」
土屋光道先生



阿弥陀様 (光明寺大殿)

会長任期を満了して 「帰敬会」を中心に

前会長 戸松 秀明

長い様で短い会長任期二年間でありましたが、何とか任期を全うでき、初めての試みの「帰敬会」を成満できましたことは、大本山光明寺、神奈川教区、教区内寺院諸大徳をはじめ、会員諸師ならびに関係各位のご教導とご協力があつたればこそと衷心より感謝申し上げます。

思い起こしますと、野中前会長からバトンを受け最初に行ったことは、昭和六十一年五月に臨時総会を開催し、浄青会員の上限年齢を全浄青と同じ四十三歳に引き上げることから始まりました。前執行部から引き継いだ懸案の「青年の集い」は、準備不足で六十一年度の事業計画に組み込めず翌年度に棚上げになりました。また、研修の場として二年ぶりに他宗見学会を復活させ、十夜発祥の地、京都真如堂の「引声阿弥陀経」を見学し、古式にのっとる法要は華やかさこそありませんが、伝統の重さに感動させられました。さらに、寒いさなかの一月二十五日、法然上人の御忌に「通夜念仏」を勤めさせていただき、光明寺中庭の池に薄氷がはる寒さの中で念仏を行じ身の引き締まる思いで朝を迎えることができました。

そして、二年目の六十二年度になり「青年の集い」を開催することが決定されましたが、具体的な名称や内容は決まっておらず、何から手をつけてよいやら暗中模索の状態が続きました。ようやく七月の理事会で開催日



開 会 式



半 斎 供 養

おつとめ



おつとめ



帰敬

昭和63年 2 月13日(土)



昼食 光明寺名物 精進料理



帰敬式 灌頂作法



帰敬式 一人一人に数珠と袈裟の授与



閉会式 会長あいさつ



礼拝

を六十二年二月十三日と決定し、名刹を「帰敬会」として動き始めました。十一月の立川に本部を置く「真如苑」見学会と前後し、実行委員会を組織し、「帰敬会」の勸戒師を藤吉慈海大本山光明寺御法主、講師に土屋光道先生にお願いすることになり、内容も具体的に検討されてまいりました。

「帰敬会」当日は、大変寒い時期にも係わらず、五十名ちかくの受講者が参加し、お経を誦誦し、また土屋光道先生の「人生の真実をもとめて」と題する講話にも真剣に拝聴し、先生も大変熱が入った様子でした。短い時間でしたが受講者と浄青会員が共に礼拝、念仏を行い阿弥陀様に感謝いたしました。クライマックスの「帰敬式」では、真つ暗な大殿に蠟燭の光がまぶしく輝き、その光に心が洗われる思いがしました。この感動を忘れずにさらなる活動の礎にいたしたいと思うのであります。

合掌

「帰敬会」日程表

- 一、九時十五分 開会式（オリエンテーション）
- 一、十時十五分 講話（講師 土屋光道先生）
- 一、十一時十五分 礼拝 念仏（半斎供養）
- 一、十二時 昼食
- 一、十二時四十分 映画鑑賞「わたしたちの法然さま」
- 一、十三時四十分 講話（土屋光道先生）
- 一、十四時四十分 帰敬式 礼拝 念仏
- 一、十六時 アンケート
- 一、十六時三十分 閉会式

他宗教見学 (62・11・13)

「真如苑」を訪問して

高橋源治

真如苑の総本部として立川には数ヶ所の修行所、信徒会館、青年会館が林立している。

真如苑参道には、その教団のシンボルである宝輪がいたるところに見受けられ、立川駅周辺の商店街にまで「真如苑協力店」という貼り紙が目立っていた。



涅槃像の前で

それに対して、真如苑では種々の演出がなされ、精舎と呼ばれる建物では、教主自作の巨大な涅槃像があり、舞台形式の内陣が印象的であった。真如苑の青年部の方々とのディスカッションでは、「接心修行」という言葉がよく出た。

「接心修行」とは、霊能者からの霊言などを聞き、様々な悩みや不安を自らの「修行」によって克服するものである。

このような霊能者を目指している人は多い。

霊能者を目指している信者の人たちは、「徳」を積む。徳とは、布教活動・教化活動など

をし、また新たな信者を入信させたり、社会活動を行う。

最後に、我々浄土宗僧侶でも布教活動や教化活動などの力の入れかたなど見習いたいものだと思う。

念仏行進

(62・10・14)

十月十四日大本山光明寺に於て例年通りの念仏行進を開催し、会員十数名の参加を頂きました。好天の中、午前中、JR鎌倉駅まで行進し、駅前にて布教活動を二・三十分行い、また光明寺まで念仏の声高らかに行進して帰って来ました。昼食後三浦組村井上人の日中唱導師のお練りに随喜し、九品寺より光明寺まで念仏行進をさせて頂きました。

第5回神浄青ソフト

(62・10・2)

第5回関プロソフト

(62・10・27・28)

例年珍プレー・迷選手(?)を多数輩出する神奈川教区長杯争奪ソフトボール大会が快晴の南足柄体育センターグラウンドで、各組のスタープレーヤーを揃えて行なわれた。第一回以来優勝のない小田原が、地元開催ということで燃え優勝。二位は京浜・港北チーム。三位は港南・高座・鎌倉、四位は三浦・中郡チームであった。(戸松前会長の力でしようね。)

一方、関東教化センター杯ソフトボール大会は、埼玉浄青担当で行なわれました。王座奪回を目指す神奈川は、予選から奇跡の逆転を続け四年連続決勝リーグに残りました。し

かし平均年齢二十二歳の「埼玉」とコワイ(!!)「山梨」になすすべもなく破れ三位でした。決勝はサヨナラ勝ちで埼玉。見事地元の花を咲かせました。今年こそガンバロウ。

通夜念仏

(63・1・25・26)

宗祖法然上人の御忌に、大本山光明寺大殿において、神浄青主催の通夜念仏会が厳修されました。当日は例年に比べ暖かく、記主庭園の池の水も凍らず、参加者一同念仏の声も高らかに響き渡りました。真夜中に襲う睡魔と戦いながら、また途中に差し入れられる甘酒や、互いの励ましを感じながら15時間に渡る別時念仏会が無事成満いたしました。

花まつり

(63・4・16)

県内各寺院より寄付して頂いた、たくさんのおプレゼントをかかえ、金沢母子寮に至る階段を汗を流しながら登りつく。しかし、そこには母子寮の皆様方と子供達の温かい瞳が迎えてくれ疲れも取れる思いがする。

恒例の事ではあるが、十一回目を数える母子寮慰問も、会員自身童心に帰る、子供達と共に楽しく過ごすことができた。

光陰矢の如し、よく使われる言葉であるが四年という歳月を振り返った時、その流れの早さに驚かされると共に、さしたることも出来なかった我身を恥じるおもいで一杯である。しかしながら、小柄を支えてくれた流石なスタッフと、神浄青会員諸師のお陰で大過なく任を全うさせて頂き拝謝申し上げたい。

全浄青は「青年に念仏を」のテーマのもと四年間活動を展開してきたが、その歩みはスローであったがステディーなものであった。

中央研修会では、それぞれの地域にふさわしい活動を見出し、又若者の感性を少しでも理解し、更に宗義の基本を踏まえて時機相応の教えを模索することに務めた。代表者研修会では、神秘、呪術を好み、プリミティブな宗教感性をもちながら束縛を好まず教団嫌いといわれる若者を中心として僧俗一体となった青年の集いを開催した。参加者に多大な感銘を与えたが私共の懈怠も指摘され、今後各教区での開催を強く要望されたのである。各教区でこうした集いを開催しそれが寺単位、教区単位の組織化に

全浄青の四年間を 振り返って

前理事長 里 見 嘉 嗣

繋がり、やがては宗務総長の指針でもある浄土宗仏教青年会へと発展していくのである。幸いにも英邁なる神浄青会員諸師は、その意をくみとり帰郷会を開催し、今後の継続的發展を約されたことは欣快の至りである。全国的には未だに観念を重要視する傾向が強いが、行動をおこして

こそ様々な問題点が惹起するのであつて、傷を恐れては何も生まれない。体験の積み重ねが組織を盤石にし、人間としても大きく成長するのである。

行動の伴わない理想屋、世渡り上手なお経屋は迷惑千万である。自らが真剣に学び、社会に飛び込む勇氣をもって頂きたい。

小柄も浄青活動に携わることで早や十年、

いよいよマウンドを降りる時がきた。今は安堵感と共に寂寥の感深きものがあるが、今後グローバルな視野をもって衆生縁を求めて歩いていきたい。神浄青の今後益々の発展と、会員諸師のご健闘を至心に祈念するものである。



第十三回全浄青代表者研修会は、去る昭和六十二年十二月五、六日の両日、テーマ「青年に念仏を」——もう一人の自分をみつめて——の下、大本山光明寺に於て、僧俗八十五名の参加者を得て開催されました。

前回まではプロック担当という形で開催して来たのですが、今回初めて執行部担当となり、神奈川教区浄青の協力を戴き、盛況裡に円成することが出来ました。ここに厚く御礼申し上げます。

今回の研修のポイントは、前回善光寺に於ける研修を基に、行を中心据え、僧俗共に聞法し、更に深く念仏・礼拝行を行い、それを通して普段と違う自分を見い出すきっかけとしたいということでした。

「念仏で勝負する」と題する寺内大吉師の講話に始まり、夕食後の大本山光明寺に伝えられる「引声念仏」のお勤めの後、本堂を暗くした中で

第13回全浄青 代表者研修会

— もう1人の自分をみつめて —

伊 藤 彰 哲
(62.12.5 ~ 6 大本山鎌倉光明寺)

の礼拝・別時念仏が夜更けまで続けられました。

翌朝は、代研恒例(?)となった清清しい雪の湘南鎌倉の朝を迎えました。(因に善導寺・善光寺に続いて三度目) そのような訳で残念乍ら

御廟参拝はパス。

フリートキング、全体会では活発な意見が出され、大いに意見が交換されたようです。

研修会終了後、希望者は主催者の準備したバスに乗って、鎌倉大仏・長谷寺・鶴ヶ岡八幡宮等を観光した後、それぞれの地へと帰って行きました。

今回の研修会を通じて感じたことは、共に行うことの大切さを改めて再認識させられたと言うことです。



シンガポール

日本人墓地参拝法要と

宗教事情視察報告

京浜組慶岸寺 林 田 康 順

京浜浄青では六十二年六月、日本人墓地参拝法要と宗教事情視察を目的として会員六名がシンガポールへ飛び立った。シンガポール共和国は一九六五年十二月にマレーシアより独立し共和国になった新しい国で、日本の淡路島とほぼ同じ広さの小さな国である。しかし経済的には大変豊かで国民一人あたりのGNPも高く韓国・台湾等と共にNICsの一角を担う経済国家である。

以下紙面の都合上、要点を掻い摘まんで報告してゆく。

①日本人墓地参拝法要―都市の郊外、閑静な住宅地の中に、一万人以上の日本人が眠る日本人墓地がある。古くはからゆきさんの共同墓地として始まり、太平洋戦争で死んだ軍人・作業隊員の遺骨も合祀されている。我々は殉国者追悼会の差定に則り法要を行った後墓地を参拝した。一般の軍人達の墓に比して名も知れぬからゆきさんの墓はみすばらしく異国で果てた彼女達のやるせなかったで

あろう胸の内に思いを馳せた。また、この墓地は現地日本人会の人々により管理されているが昨今経済的に行き詰まり、本国からの援助を望んでいる。しかし、靖国神社をはじめ未解決の問題を多く抱え、複雑な宗教事情の入り組む我国では実現は容易ではないであろう。

②宗教事情視察―多民族国家シン



ガポールでは、宗教も道教二九%、仏教二七%、イスラム教十六%、キリスト教十%、ヒンズー教四%と世界の中の様々な宗教が同居している。それぞれの宗教が日常の生活の中に溶け込み、人々は宗教と密着した生活をして、町の中にはそれらの寺院・モスクが数多く建っている。我々はいは各宗の寺院・モスクに足を運び、その僧侶や信者に直接話を聞き、町中の学校や一般家庭の宗教的事情を見聞して、彼等の心の中に宗教が深く根差していることを知り、信仰の強さ、大切さを再認識した。我々が仏教の双林寺という寺院を参拝していた時に、偶然ウェディングドレスを着た新婚のカップルとその関係者が記念撮影をしていた。彼等に話を詳

しく聞いてみると、シンガポールでは結婚式の時等は必ず寺院に参拝するという。葬式仏教と言われている。仏教界の現状が見做すべき面があるのではないか、と思う。

③シンガポールのある側面―シンガポールの街は両極端である。観光客が訪れる場所や高層マンションが立ち並ぶ一面は整備が行き届き実に清潔である。一方、古くから特定の民族が集まって生活している場は全くその逆である。これは前述の多民族国家・多宗教国家であることに起因する。やはり民族・宗教が同一であると、閉鎖的・排他的になり易くその地域だけでなく、一国全体の近代化に大きく差障という。そこでシンガポール政府は民族隔和、人口増加対策(シンガポールでは平均一夫婦四・五人の子供を持つ)として高層マンションを建て各民族を平均的に入居させているのだ。我国ではなかなか理解し難いことではないだろうか。

発行所

鎌倉市材木座六一七―一九

光明寺中神奈川教務所内

浄土宗神奈川教区青年会

● 発行人

野 呂 幸 忍

● 編集委員会

森本 祐康 宮林 雄彦 西井 久雄

永原 道雄 吉水 智栄 杉田 俊一

夏見 裕貴